

発話における非流暢性と言語発達

——文献的考察——

Language Acquisition and Speech Disfluency in Children: A Review of Research Findings

伊藤友彦

Tomohiko Iro

(昭和60年10月11日受理)

I はじめに

幼児期における発話の非流暢性を言語発達との関連で検討することは、言語発達の一側面としての発話の流暢性の獲得過程を知るうえで重要な情報を提供してくれるのみならず、流暢性の障害としての吃音の発生機序解明の手がかりを与えてくれるものと思われる。しかし、発話の非流暢性と言語発達との関係の研究は、その意義の重要性にもかかわらず、発達心理(言語)学の領域においても、言語病理学の領域においても、中心的な研究の一つとみなされることはなく、このテーマに関する本格的な取り組みはまだ行われていない。

本論文の目的は、幼児の発話における非流暢性と言語発達との関係について、これまでに何が明らかになっているかを整理し、従来の研究の問題点を明確にするとともに、今後の研究の方向性について考察することである。

II 幼児の非流暢性と言語発達との関係に関する従来の知見

幼児の発話における非流暢性は、言語病理学の領域においては、吃音の発生との関連で注目されるようになった。即ち、幼児期に一般にみられる非流暢性が吃音とどのような関係にあるかという吃音の発生をめぐる理論(Johnson^{28,29} Bloodstein^{7,8,9})との関連で問題となってきた。そのため、幼児期に一般にみられる非流暢性に関する研究は、吃音の特徴と比較するための単なる非流暢性の特徴の記述に終わっているものが多く、非流暢性を言語発達との関連で詳しく検討したものは少ない。一方、発達心理(言語)学の領域においては、思考ないし発話過程との関連で非流暢性の検討がなされてきているが^{36,37}今回は前者、すなわち言語病理学の領域で行われてきた、非流暢性と言語発達に関する主な研究を検討の対象としてとりあげる。

1. 幼児期に一般にみられる非流暢性を対象とした研究

Davis^{13,14}は、2歳から5歳までの普通児62名を対象に、自由遊び場面における発話サンプルを収集し、くり返しタイプの非流暢性(「音節のくり返し」、「語のくり返し」、「句のくり返し」)について検討した。その中で、くり返しタイプの非流暢性と、いくつかの言語発達尺度(発話の長さの平均値: Mean Length of Utterance, 語い、複文の割合など)との関連を検討し、

結論として、language maturity は、くり返しタイプの非流暢性と密接に関連しているとはみなせないとしている。しかし、Davis の研究は、① テープレコーダーによる録音がなされていない、② 発話サンプル数が明記されていない、③ 文と文との間に別の語句が入った場合（例“Let's rock on the rocking horse. Timmy. Let's rock on the rocking horse.”）も「句のくり返し」に含めるような、かなり独特のカテゴリーによっている、など方法論上の問題を含んでいる。

Metraux³²⁾は1歳6カ月から4歳6カ月までの幼児207人を6カ月ごとに7群に分け、それぞれの時期の話し方の特徴を記述している。それによると、くり返しタイプの非流暢性の頻度が最も高くなるのは3歳6カ月であることなどがわかる。しかし、Metraux のこの研究は単に印象を記述したものであり、記述のし方も明示性、一般性に欠ける。また、言語発達についてもふれているが、断片的であるため非流暢性と言語発達との関連が明確ではない。

Davis, Metraux によるこれら2つの研究は、いわば古典的研究であり、よく引用されているが、上述のように方法論上の問題がある。

1970年代になると Muma や Pearl らの研究が現われる。Muma³³⁾は4歳の普通児を流暢群と非流暢群とに分け、使用する文構造を変形操作の点から比較し、流暢群の方が double-base transformation を多く用いるという結果を得ている。また、Haynes ら¹⁹⁾ Pearl ら⁴¹⁾の実験では、非流暢性が文構造の複雑さと関連していることが示されている。

Colburn ら^{10,11)}の研究は、幼児期に一般にみられる非流暢性を言語発達との関連で検討したものであり、欧米における初めての本格的研究といえる。Colburn ら¹¹⁾は、幼児の非流暢性は、2～3歳においては、その子にとって新しい semantic-syntactic 構造を使い始めたときに多くなり、使いなれると、“practice effect”によって減少すると報告している。しかし、Colburn らの研究の限界は対象児が2～3歳に限定されている点である。

本邦においては、伊藤²³⁻²⁶⁾が幼児の非流暢性を言語発達との関連で研究し始めている。幼児の自由会話における非流暢性の経年変化を検討した過去の研究（2～5歳を対象とした Davis^{13,14)}の報告、4～8歳を対象とした Haynes ら¹⁸⁾の報告、2～6歳を対象とした Bjerkan⁶⁾の報告）は、いずれも横断的研究であり、非流暢性が特定の年齢または言語習得段階で顕著になるという結果は得られていない。しかし、伊藤²³⁾の2～6歳を対象とした横断研究、3～6歳までの縦断研究（伊藤²⁴⁾によれば、幼児の非流暢性は3～4歳で高く、5～6歳では減少している。伊藤^{23,24)}はまた、2～4歳児と5～6歳児とでは非流暢性と文構造との関係が異なることを報告している。即ち、2～4歳児（特に2～3歳）では、使用する文の構造と長さが非流暢性と密接に関係するが、5～6歳児ではこのような傾向がなくなるとしている。さらに、伊藤²⁵⁾は実験的手法を用いて、この点を確認するための研究を行い、その結果、5～6歳児では、統語的複雑さが2～4歳児の場合ほど直接的には非流暢性と関連しないことを明らかにした。

Colburn¹¹⁾と伊藤²³⁻²⁵⁾の結果から、2～4歳（特に2～3歳）は、使用する文構造の複雑さが非流暢性の生起と密接に関連していることがうかがわれるとともに、複文など複雑な構文を習得し始める時期に非流暢性が生じやすくなる可能性が示唆される。

2. 吃音と評価されるような特徴をもつ非流暢性を対象とした研究

吃音と評価されるような特徴をもつ非流暢性（以下、吃音と略記する）と言語発達との関係については掘り下げた検索はまだ行われていない。しかし、一般的な言語検査を用いた研究で

は普通児群に比して吃音児群の成績が劣ること^{38,42,45,53,57,61}吃音児群の方に言語発達が遅れている子が多く認められること^{4,36,59}などが報告されている。Andrewsら⁵⁾Wingate⁶⁷⁾は従来の文献を概観し、これらの2点をかなり確かな知見として位置づけている。

しかし、吃音と言語発達との関係の重要性をはっきり認識し、その方向での研究を続けている研究者は、Bloodstein, Wall, 伊藤などわずかである。以下、これら3名の研究の一部を簡単に紹介する。

なお、言語発達との関連の検討そのものを意図したものではないが、吃音と言語発達との関連についても貴重な情報が得られる報告として、Wyatt⁶⁸⁾ Yairi⁶⁹⁾などがある。国島ら³¹⁾の報告は吃音を主訴とする16名を対象とした貴重な縦断的データであるが、言語発達との関連についての情報が無いのが惜まれる。

Bloodstein⁸⁾は、吃音幼児6名を対象として吃音が起こる場 (loci) を分析し、初期の吃音は語頭音の種類、語の長さ、語の使用頻度などに直接影響されて生じるのではなく、統語構造との関連で生ずると述べている。Wallら⁵⁹⁾は、吃音児において吃は文の構成上、重要なつなぎめで生ずると報告している。Wallら⁵⁹⁾は過去の研究を概観し、今後の研究の方向性として、吃音の問題は language and speech production との関連で検討すべきであると主張している。

伊藤²⁰⁾は吃音を主訴とする幼児一名について非流暢性の経年変化を言語発達との関連で縦断的に検討した。その結果、対象児は複文や長文(3文節以上文)を使用し始める時期に高い頻度の非流暢性を示し、それらの構文がほぼ一定の割合で使用される時期になると、非流暢性は減少し始めることが明らかになった。この結果は幼児期に一般にみられる非流暢性を対象とした Colburn¹¹⁾伊藤^{24,25)}の報告と一致している。一方、Hall²⁰⁾は、言語障害児2例の言語習得過程に関する事例的研究から、発話の非流暢性は、普通児、言語障害児を問わず、ある一定の言語習得段階に達したときに顕著になるのではないかと述べている。Colburn¹¹⁾伊藤²⁴⁻²⁶⁾の結果はこれを支持している。

3. 言語発達そのものを対象とした研究

以上2つの節で取りあげた研究は「非流暢性と言語発達」研究において「非流暢性」にむしろ視点が近いものであった。以下、「言語発達」に視点がむけられている研究をいくつか列挙する。

Gallagher¹⁵⁾は、「言い直し」の内容が言語発達段階によって異なっていることを明らかにしている。この報告は、2歳児の「言い直し」も6歳児の「言い直し」も同じ「言い直し」として、頻度だけを問題にしてきた従来の非流暢性研究に疑問を投げかけるものである。この点で、Gallagher¹⁵⁾の研究は重要な意味をもつ。また、この研究の特徴は言語知識の習得と語用論的能力の発達との相互作用という点から「言い直し」の発達的变化を捉えている点にある。言語学、心理言語学の領域の成果をふまえ、発達の視点にたった非流暢性の研究としての意義もまた大きい。また、Gallagherら¹⁶⁾は「言い直し」を普通児と言語障害児とで比較し、「言い直し」の頻度自体は言語障害児においても高かったが、その内容が普通児とは異なっていたと報告している。Gallagher¹⁷⁾はさらに、実験的研究によって得られた「言い直し」についての知見が自然な会話場面にもあてはまるかどうかについての検討も行っている。

Kramer³⁰⁾ Scott⁴⁴⁾は、子どもは既に2歳から、聞き手の反応に対して敏感であり、その必要があると判断した場合は、言い直すことによって会話を続けようと努力する傾向があることを

明らかにしている。Tomasello⁵⁴⁾の結果は、2歳児は既に familiarity の違う相手に対しては言い直しにより情報内容を変えられることを示している。この種の報告としては他に Scherer⁴⁹⁾ Wilcox⁶⁰⁾らのものがある。これらは「言い直し」「くり返し」「挿入」などを幼児の語用論的側面の発達との関連で検討したものであるが、蓮見ら²¹⁾は、ことばの反復をピアジェの発達理論との関連で検討している。

以上、幼児の発話における非流暢性と言語発達との関係に関する従来の知見を概観した。報告の数自体が少いこと、全ての知見が広く確認されているわけではないことから、これまでの知見を要約することは無理であるが、研究の流れについては、次のようにまとめることができよう。

つまり、非流暢性と言語発達に関する 1950 年代までの研究は、吃音研究の下位領域の一つとしての位置づけしかなく、言語発達との関係について本格的に取り組んだものは少い。しかし、1970 年代以降になると、言語学、心理言語学の領域の知見をふまえた非流暢性研究が増加しつつある。

今後、統語論、語用論という言語学的ワク組みからの非流暢性研究がさらに必要であろう。また、これまで試られていないテーマの一つとして、linguistic awareness ないし metalinguistic abilities の発達と非流暢性との関係の研究も興味深いと思われる。言語学、心理言語学的ワク組みによる非流暢性研究が、逆に、非流暢性を手がかりとした言語学的レベルの検索として、言語学、心理言語学そのものの領域に貴重な情報を提供することも十分考えられる。

III 従来の研究の問題点

非流暢性と言語発達との関係に関する従来の研究における問題点の第一は、両者の関連性を指摘する研究者が多いにもかかわらず、研究の数そのものが少ないことである。2番目の問題は、1番目の問題とも関係するが、信頼しうる normative データの蓄積がないという点である。その結果、信頼性に疑問があるデータが、あたかもそれが非流暢性と言語発達に関する代表的なデータであるかのような扱いを受け、吃音に関する教科書的な文献に引用されている場合が少くない。Davis^{13,14)} Metraux³²⁾のデータがその典型的な例である^{34,62)}

第3番目は用語の問題である。Johnson^{28,29)}以来、「吃音」、「正常な非流暢性」(normal nonfluency) という用語が盛んに用いられている。これらの用語は、あたかも幼児期の非流暢性には性質の異なる2種類の非流暢性があることが自明であるかのような印象を与える。実際は、幼児期の非流暢性をこのように二分することが妥当であるかどうか、実証されていないのが現実である。Riper⁵⁶⁾内須川⁵⁵⁾が指摘しているように、従来、吃音というカテゴリーに入れられた群も、いくつかのグループに分けられそうであるし、Siverman, E.M. の一連の研究^{45~52)}からは、「正常な非流暢性」には個人差が大きく、条件によってもかなり変動しやすいなど、一般に考えられているほど単純なものではないことが明らかになってきている。さらに、吃音の定義をめぐるのは、Wingate^{63~67)} Adams^{1,2,3)}のように、非流暢性の特徴から吃音を規定しようとする立場、Riper⁵⁶⁾ Williams⁶²⁾のように、非流暢性の特徴よりも心理的反応面を重視する立場がある、などのことを考えあわせると、幼児の非流暢性研究は、もっと原初的なところから、つまり、「吃音」、「正常な非流暢性」というワクに捉われることなく、現象自体を観察するところからスタートしなければならぬのではないかと思われる。その意味で、これらの用語は安易に使われすぎたきらいがある。

第4番目の問題点は、従来の研究の多くが非流暢性を十把一からげに扱ひ、かつ、各タイプの非流暢性をもつ意味が発達段階によって異なる可能性を無視して、頻度のみを問題にする傾向があった点である。前述のように、Gallagher¹⁵⁾の結果は、「言い直し」の内容が発達段階によって異なっていることを示唆している。このことは、「言い直し」以外のタイプの非流暢性にも同様の現象、即ち、発達段階によって、その内容が異なる可能性を示唆している。Myersら³⁹⁾も指摘するように、Johnson^{27~29)}以来のカテゴリーを用いて、単にその種類と頻度だけを問題にする研究からは言語発達の一側面としての非流暢性の発達について有意義な知見は得られないことがうかがわれる。

IV 今後の研究の方向性について

以下では、「流暢性の発達」自体を目的とした研究が必要であることを述べる。

従来の「非流暢性と言語発達」研究は、主に吃音研究のための一つ的手段としてなされてきており、このテーマ自体が独自の研究領域を形成してはいなかった。研究数が少なかった理由の一つはこの点にあると思われる。しかし、近年、幼児は流暢性を獲得していくという発想、流暢性の発達ないし獲得という概念が定着しつつあり、「流暢性の発達」というテーマそのものが独立した研究領域となりうる準備が整いつつある。

Daltonら¹²⁾の著書には、“The development of fluency in children”という一節があり、村田⁴⁰⁾の著書「幼稚園期の言語発達」には、「自己編集と話の停滞」という節が設けてある。Williams(笹沼他訳)⁶¹⁾には、「話すことを学んでいるとみなされる幼児」、「話すことを学び終えた」とみなされる時、などの記述がみられる。Adams^{1,2)}にも“child's acquisition of normal fluency patterns”や、“child's development of normal fluency”という表現がある。同様の表現は、伊藤²²⁾大橋⁴⁰⁾ Wall⁵⁹⁾にも認められる。

しかし、上述のDalton¹²⁾の“The development of fluency in children”の節の内容には、流暢性そのものに直接関係したデータは皆無であり、ごく一般的な言語発達に関する知見が述べられているにすぎない。このことに象徴されるように、「流暢性の発達」については現在まで、その実質的内容がほとんどわかっていない。

「流暢性の発達」研究の最終的な目標は、流暢性の発達過程を記述し、かつ、その背景にあるメカニズムを理論的に説明することである。その際、研究の基本的立場としては万人共通の発話システムがあること、その習得、確立の仕方に普遍的なものがあるということを前提とし、この発話システムの内容、及び形成過程について検討するという方向にむかっただけの研究が必要であると思われる。しかし、研究の蓄積自体が乏しいという現実をふまえ、当面は、このワクにあまり捉われないことなく、「流暢性の発達」という概念に、より明示的で実質的な内容をもたせるための幅広い研究の積み重ねが必要であろう。Colburn,^{10,11)}伊藤^{22~26)}は、このような方向にむけての研究を開始している。

V ま と め

幼児の発話における非流暢性と言語発達との関係に関する、主として言語病理学の領域において行われた文献を整理・検討し、以下の知見を得た。

- 1) 従来の、非流暢性と言語発達との関連に関する研究は、吃音研究の下位領域としてしかみなされなかったこともあって、文献数自体が少ない。

- 2) 非流暢性の特徴に視点がおかれているものが多いということとも関連するが、言語発達との関係について掘り下げた研究が少ない。
- 3) 近年、言語学、心理言語学の領域の成果をふまえた、むしろ言語発達そのものに視点をあてた研究が行われはじめている。
- 4) 従来の研究の問題点としては、① 信頼しうる normative データの蓄積がない、② 「吃音」と「正常な非暢性」という二分法が安易に用いられている、などの点がある。

上記の結果をふまえ、今後の「非流暢性と言語発達」研究の方向性について考察を加えた。

文 献

- 1) Adams, M.R.: A Clinical Strategy for Differentiating the Normally Nonfluent Child and the Incipient Stutter. *J. Fluency Dis.*, 2: 141—148, 1977.
- 2) Adams, M.R.: The Young Stutterer; Diagnosis, Treatment and Assessment of Prognosis. *Seminars in Speech, Language and Hearing*, 1: 289—299, 1980.
- 3) Adams, M.R., et al.: Stuttering and Fluency: Exclusive Events or Points on a Continuum? *J. Fluency Dis.*, 6: 197—218, 1981.
- 4) Andrews, G. and Harris, M.: The Syndrome of Stuttering. *Clinics in Developmental Medicine* (No. 17). London. Heinemann, 1964.
- 5) Andrews, G. et al.: Stuttering; A Research Findings and Theories Circa 1982. *JSHR*, 48: 226—246, 1983.
- 6) Bjerkan, B.: Word Fragmentations and Repetitions in the Spontaneous Speech of 2—6—yr—old Children. *J. Fluency Dis.*, 5: 137—148, 1980.
- 7) Bloodstein, O.: Stuttering and Normal Nonfluency; A Continuity Hypothesis. *Brit. J. Dis. Communi.*, 5: 30—39, 1970.
- 8) Bloodstein, O.: The Rules of Early Stuttering. *JSHD*, 39: 379—394, 1974.
- 9) Bloodstein, O.: A Handbook on Stuttering. National Easter Seal Society for Clipped Children and Adults. 1975.
- 10) Culburn, N. and Mysak, E.: Developmental Disfluency and Emerging Grammar I: Disfluency Characteristics in Early Syntactic Utterances. *JSHR*, 25: 414—420, 1982.
- 11) Culburn, N. and Mysak, E.: Developmental Disfluency and Emerging Grammar II: Co-occurrence of Disfluency with Specified Semantic-syntactic Structures. *JSHR*, 25: 421—427, 1982.
- 12) Dalton, P. and Hardcastle, W.J.: Disorders of Fluency and their Effects on Communication. New York. Elsevier North-Holland.
- 13) Davis, D.M.: The Relation of Repetitions in the Speech of Young Children to Certain Measures of Language Maturity and Situational Factors. *JSD*, 4: 303—318, 1939.
- 14) Davis, D.M.: The Relation of Repetitions in the Speech of Young Children to Certain Measures of Language Maturity and Situational Factors. Part II. *JSD*, 5: 235—246, 1940.
- 15) Gallagher, T.: Revision Behaviors in the Speech of Normal Children Developing Language. *JSHR*, 20: 303—318, 1977.

- 16) Gallagher, T. and Darnton, B. : Conversational Aspects of the Speech of Language-Disordered Children ; Revision behaviors. *JSHR*, 21 : 118—135, 1978.
- 17) Gallagher, T. : Contingent Query Sequences within Adult-Child Discourse. *J. Child Language*, 8 : 51—62, 1981.
- 18) Haynes, W.O. and Hood, S. B. : Language and Disfluency Variables in Normal Speaking Children from Discrete Chronological Age Groups. *J. Fluency. Dis.*, : 57—74, 1977.
- 19) Haynes, W.O. and Hood, S.B. : Disfluency Changes in Children as a Function of the Systematic Modifications of Linguistic Complexity. *J. Communi. Dis*, 11 : 79—93, 1978.
- 20) Hall, P.K. : The Occurrence of Disfluencies in Language Disordered School Age Children. *JSHD*, 42 : 364—369, 1977.
- 21) 蓮見元子他 : ことばの反復についての縦断的検討. *音声言語医学*, 22 : 52, 1981.
- 22) 伊藤友彦 : 幼児の発話における非流暢性の研究. 東北大学教育学研究科修士論文, 1980.
- 23) 伊藤友彦 : 幼児の発話における非流暢性と言語習得との関係. *音声言語医学*, 23 : 211—220, 1982.
- 24) 伊藤友彦 : 3歳から6歳にかけての発話における非流暢性の変化と文構造の習得——縦断研究——. *音声言語医学*, 24 : 248—256, 1983.
- 25) 伊藤友彦 : 文構造の習得と5～6歳児における発話の非流暢性の減少との関係. *音声言語医学*, 26 : 1—5, 1985.
- 26) 伊藤友彦 : 幼児吃音一例の言語症状の変化と言語発達. *音声言語医学*, 26 : 120—121, 1985.
- 27) Johnson, W. (ed.) : *Stuttering in Children and Adults*. Minneapolis : Univ. of Minnesota Press, 1955.
- 28) Johnson, W., et al. : *The Onset of Stuttering*. Minneapolis. University of Minnesota Press, 1959.
- 29) Johnson, W., et al. : *Diagnostic Methods in Speech Pathology*. Harper and Row, 1963.
- 30) Kramer, C., et al. : A Comparison of Language Samples Elicited at Home and in the Clinic. *JSHD*, 44 : 321—338, 1979.
- 31) 国島喜久夫他 : 発音直後の吃音幼児——言語症状を中心に——. *聴覚言語障害*, 12 : 97—106, 1983.
- 32) Metraux, R.W. : *Speech Profiles of the Pre-school Child 18 to 54 Months*. *JSHD*, 15 : 37—53, 1950.
- 33) Morley, M.E. : *The Development and Disorders of Speech in Childhood*. Edinburgh. Livingstone, 1957.
- 34) 森山晴之 : 吃音 : 堀口申作編 : 聴覚言語障害, 医歯薬出版, 1980.
- 35) Muma, J.R. : *Syntax of Preschool Fluent and Disfluent Speech ; A Transformational Analysis*. *JSHR*, 14 : 428—441, 1971.
- 36) 村田孝次 : 語いと構文の発達 : 岡本夏木ら編, 言語機能の発達. 金子書房, 1969.
- 37) 村田孝次 : 幼稚園期の言語発達. 培風館, 1972.
- 38) Murray, H.L. and Reed, C.G. : Language abilities of Preschool Stuttering Children. *J. Fluency Dis.*, 2 : 171—176, 1977.
- 39) Myers, F.L. and Wall, M.L. : Issues to Consider in the Differential Diagnosis of Normal Childhood Nonfluencies and Stuttering. *J. Fluency Dis*, 6 : 189—195, 1981.
- 40) 大橋佳子 : 吃音の発達 : 内須川洸他編, 吃音. 福村出版, 1982.

- 41) Pearl, S.Z. and Bernthal, J.E.: The Effect of Grammatical Complexity upon Disfluency Behavior of Nonstuttering Preschool Children. *J. Fluency Dis.*, 5 : 55—68, 1980.
- 42) Perozzi, J.A. and Kunze, L.H.: Language Abilities of Stuttering Children. *Folia Phoniatica*, 21 : 386—392, 1969.
- 43) Scherer, N. and Cogging, T.: Responses to Requests in the Dialogues of Mothers and Their Stage I Children. *JSHR*, 25 : 58—64, 1982.
- 44) Scott, C. and Taylor, A.: Comparison of Home and Clinic Gathered Language Samples. *JSHD*, 63 : 482—495, 1978.
- 45) Silverman, E.M. and Williams, D.W.: A Comparison of Stuttering and Nonstuttering Children in Terms of Five Measures of Oral Language Development. *J. Communi. Dis.*, 1 : 305—309, 1967.
- 46) Silverman, E.M.: Situational Variability of Preschoolers Disfluency: Preliminary Study. *Percept. mot. Skills*, 33 : 1021—1022, 1971.
- 47) Silverman, E.M.: Geneality of Disfluency Data Collected from Preschoolers. *JSHR*, 15 : 84—92, 1972a.
- 48) Silverman, E.M.: Preschoolers Speech Disfluency: Single Syllable Word Repetition. *Percept. mot. Skills*, 35 : 1002, 1972b.
- 49) Silverman, E.M.: Syntactic Complexity of Preschoolers Egocentric and Socialized Speech. *Percept. mot. Skills*, 35 : 247—249, 1972c.
- 50) Silverman, E.M.: The Influence of Preschoolers Speech Usage on Their Disfluency Frequency. *JSHR*, 16 : 474—481, 1973.
- 51) Silverman, E.M.: Word Position and Grammatical Function in Relation to Preschoolers Speech Disfluency. *Percept. mot. Skills*, 39 : 267—272, 1974.
- 52) Silverman, E.M.: Effect of Selected Word Attributes on Preschoolers Speech Disfluency; Initial Phoneme and Length. *JSHR*, 18 : 430—434, 1975.
- 53) Stocker, B. and Parker, E.: The Relationship between Auditory Recall and Dysfluency in Young Stutterers. *J. Fluency Dis.*, 2 : 177—187, 1977.
- 54) Tomasello, M. et al.: Children's Speech Revisions for a Familiar and an Unfamiliar Adult. *JSHR*, 27 : 359—363, 1984.
- 55) 内須川 洸: 幼児吃音の治療教育: 内須川洸他編: 吃音. 福村出版, 1982.
- 56) Van Riper: *The Nature of Stuttering*. Prentice Hall, 1973.
- 57) Wall, M.J.: A Comparison of Syntax in Young Stutterers and Nonstutterers. *J. Fluency Dis.*, 5 : 345—352, 1980.
- 58) Wall, M.J., et al.: Syntactic Influences on Stuttering in Young Child Stutterers. *J. Fluency Dis.*, 6 : 283—298, 1981.
- 59) Wall, M.J. and Myers, F.L.: A Review of Linguistic Factors Associated with Early Childhood Stuttering. *J. Communi. Dis.*, 15 : 441—449, 1982.
- 60) Wilcox, J. and Webster, E.: Early Discourse Behavior; Children's Responses to Listener Feedback. *Child Development*, 51 : 1120—1125, 1980.
- 61) Williams, A.M. and Marks, C.J.A.: A Comparative Analysis of the ITPA and PPVT Perfor-

- mance of young Stutterers. JSHR, 15 : 323—329, 1972.
- 62) Willians, D.E. : 笹沼澄子他監訳 ; 入門コミュニケーション機能障害 : 医歯薬出版, 1984.
- 63) Wingate, M.E. : Evaluation and Stuttering Part I. JSHR, 27 : 106—115, 1962.
- 64) Wingate, M.E. : A Standard Definition of Stuttering. JSHD, 29 : 484—489, 1964.
- 65) Wingate, M.E. : Stuttering ; Theory and Treatment. New York. John Wiley, 1976.
- 66) Wingate, M.E. : Criteria for Stuttering. JSHR, 20 : 596—607, 1977.
- 67) Wingate, M.E. : Speaking Unassisted ; Comments on a Paper by Andrews et al. JSHR, 48 : 255—263, 1983.
- 68) Wyatt, G.L. : Language Learning and Communication Disorders in Children. New York, Free Press, 1969.
- 69) Yairi, H. : Disfluencies of Normally Speaking Two-Year Old Children. JSHR, 24 : 490—495, 1981.
- 70) Yairi, H. : The Onset of Stuttering in Two-and Three-Old Children : A Preliminary Report. JSHR, 48 : 171—177, 1983.